綴葉 ていよう

'23 11

No. 422

あなたが創る生協の書評誌

話題の本棚

石川賢治著『月夜の晩に』

山尾悠子著『仮面物語　或は鏡の王国の記』

特集／つくる

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316
京都市左京区吉田二本松町　吉田南生協会館２階
Tel:771-6211 ／ E-mail:ku-teiyo@univ.coop
綴葉HP: http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/

univ. CO-OP 京大生協 綴葉編集委員会

月光写真

月夜の晩に

石川賢治著
小学館

――1984年の夏、ハワイのカウアイ島で仕事が終わり、寝る前に海まで散歩に出かけました。満月の月明かりに照らされた原っぱを通り、真っ暗な林を抜け、月光に輝く白い砂浜に出ました。

波打ち際に座ると、海、水平線、形の良い雲が浮かぶ星空、夜の風景が広がり、目の前の海面すれすれを飛び過ぎて行く鳥の姿までがクッキリと見えました。そのとき初めて、月の光で写真を撮ってみたいと思ったのです。――『宙の月光浴』あとがきより

満月の明るさは太陽光の46万5000分の1。石川氏は、三〇年以上にわたり満月の光だけで撮影を続けてきた、世界でも稀有な「月光写真家」です。初めて月光写真を撮ったのは、写真家歴22年の時。プロの常識を以て月光のみでカメラに像を写すのは不可能と決め込みつつ、「ひょっとすると影ぐらいは……」とシャッターを切ると、そこには、太陽光と同じ発色で見事に写ったジンジャーのつぼみ。この一枚に衝撃を受け、地上で宇宙実感を覚えたことが、月光写真を撮り続ける原動力になったと氏は記します。

満月の光を求めて世界中を巡った三〇年間の旅に一区切りをつけ、『月夜の晩に』では日本各地で撮られた写真が季節毎にまとめられています。これまでの写真集とは違うざらっとした表紙の手触りが指先に沁みて、宮沢賢治の童話をふっと想起するような装丁が暖かく心に沁みて、大切なアルバムを受け取ったような気持ちに。

本を開くと、真っ黒な四角の中心に小さく本のタイトルが現れ、映画が始まる前のような静けさと緊張感を味わいながら、頁を捲ります。最初は冬の月夜。暗闇に渦巻く雲は異世界への入り口みたいでぞわっとするし、雪山の滝からは飛沫と冷気が立ち上ってきます。葉を落とした木たちは、月光を浴び、鋼のようなクールさと魔力と言ってしまいたいくらいの甚大なエネルギーを、「生」を空に放っています。そう、月夜は不思議と、太陽の下よりも、「生」を強く感じさせるのです。昼間より宇宙を感じる濃い青とともに「生」がダバーと目に流れ込んできて、静寂と「生」の音に耳はキーンとし、私の鼻はツーンと、腹はズンと、頭はスパーンとやられるのです。写真の中の植物が種子を飛ばし、私の心臓で芽が猛スピードで伸びる広がる。冬の刺すような月光が春は丸みを帯びて、生物たちも優しくほころぶよう。夏は月光も元気一杯、虫たちも登場し、ワクワク感満載。秋の夜は切ないほど澄み渡り、月光に燃える紅葉は空に昇る竜みたい。この写真集は今まで以上に洗練されながら、子どもの輝く瞳を通したような純粋さをひしひし感じたのですが、地面から生物たちを見上げるようなアングルが多く見られたことが一つ要因としてある気がします。彼らの息遣いが聞こえそうな、会話できてしまいそうな空気がこの本には、夜の世界には漂っています。

夜、寂しくなったら、この本を開いてみてください。闇の中でも、地球には、宇宙には、この世界には、必ず光があるのです。（**黄丹**）

（一〇四頁　税込五五〇〇円　5月刊）

イメージの多層から生まれるグルーヴ感

仮面物語
或は鏡の王国の記

山尾悠子著
国書刊行会

「[…] この物語の要約もまったく不可能だ。要約によって、壮大な舞台装置や、二重館、石蚤、自動人形、粘土人形、不可視の虎、運河、濃霧、影といったような目も綾な小道具類がすべて置き去りになってしまうからである。とりわけ、難解だが、その分だけ実在感のある、ノミで彫りつけたような文体を紹介できないのでは、何も言わなかったのと同じことになるだろう」。四〇年以上前に出版された本書の元本『仮面物語』に時評を寄せた井上ひさしの言葉である。続けて井上は作品に称賛を与え、その賛美に世間も応えるかのように『仮面物語』は上々の売り上げを記録した。それにもかかわらず、著者山尾はかの書の復刊を拒み、これにより本作は長い眠りにつくこととなったのである。さて、こうした異例の過去をもつ『仮面物語』が眠りから覚め、装い新たに今夏お披露目されることとなったわけだが、読中私は困っていた――ページをめくる手が止められないことに。

＊

みなさんは鏡に映る自分をみて、こう思ったことはないだろうか。「これは誰だ?」「自分ではないようだ」「おそろしい」。本書を読むなかで、一度とならずこうした体験が思い出されるだろう。

物語は〈たましいの顔〉をめぐり進んでいく。己の真の姿であるたましいの顔。もしその持ち主がたましいの顔をみてしまえば、恐怖のあまり発狂する代物。人は自身のたましいの顔を恐れ、それをつくる〈影盗み〉を忌み嫌う。だがかたや、たましいの顔をみたいと望む者も。自分がなにものであり、なにものでないのか。登場人物たちはみな、その答えを探しているようだ。

＊

先の井上の評に倣い、詳しいあらすじ紹介は避けよう。むしろ、私が思う本書の魅力を拙いなりにも語らせていただきたい。

幻想小説の巨星である作者が描く世界は、生と死、光と影、熱と冷、輝きとくすみのイメージに満ちている。これら両極のイメージが、時間と空間をあべこべにした圧巻の非現実空間をつくりだしているのだ。その美しくも奇怪な世界の中で、登場人物たちは走り、飛び、叫ぶ。ガラスは砕け散り、火焔が渦巻き、水流が轟く。これらの動きの描写はしかし、なぜかスローモーションのように感じられる。一瞬一瞬を克明に切り取ったフィルムを見ているかのごとく。この一秒を永遠に引き延ばしたかのような描写の連続により、我々読み手は無重力の只中に放り出されたかのような浮遊感につつまれる。だがこの浮遊感は、文章の流れのなかで感じられるもの。だからこそ、ここで一部だけを引用することは避けたい。本書が織りなすグルーヴ感は、唯一無二の心地よさを与えてくれるだろう。

あぁ、本書の魅力を伝えきれている自信が私にはない。どうか、どうか、この本が素敵な読者の手に届かんことを。　（はらん）

（三一〇頁　税込三九六〇円　5月刊）

職業としての小説家

村上春樹著
新潮文庫

タイトルこそ「職業としての小説家」となっているものの、村上春樹による小説論・創作論がまとめられた本書は、何かを「つくる人」すべてにおすすめできる一冊だ。一応「ものを書く」という意味で「つくる人」の端くれに位置する私も、いったい何度本書を開き、心慰められてきたかわからない。たとえば次の文章。長々と引用することを許してもらいたい。

「小説を書くというのは、基本的にはずいぶん「鈍臭い」作業です。そこにはスマートな要素はほとんど見当たりません。一人きりで部屋にこもって「ああでもない、こうでもない」とひたすら文章をいじっています。机の前で懸命に頭をひねり、丸一日かけて、ある一行の文章的精度を少しばかり上げたからといって、それに対して誰が拍手してくれるわけでもありません。誰が「よくやった」と肩を叩いてくれるわけでもありません。自分一人で納得し、「うんうん」と黙って肯くだけです。本になったとき、その一行の文章的精度に注目してくれる人なんて、世間にはただの一人もいないかもしれません。小説を書くというのはそんな作業なのです」。

この文章を読むと、何かをつくっているときの自分の孤独が肯定されているように感じて、何だか心が休まってくる。「つくる」とは畢竟、自分自身との孤独な闘いにほかならないのだろう。出来上がった作品に自分は心から納得しているか――「つくる人」はこの問いを絶えず、みずからに向けなければならない。そして納得できるまで、作品と向き合い続けなければならない。妥協しそうな自分の尻を叩いてくれる「つくる」の名著。座右の書となること間違いなし！　　（ぱや）

（346 頁　税込 737 円）

特集

つくる

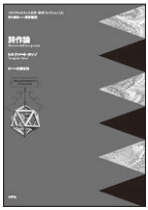
人は「つくる」生き物である。子を、田畑を、家屋を、機械を、人間関係を、言葉を、文学を、音楽を。永遠などないこの世界で、人は常に何かを「つくり」続けている。

ＡＩの成長が目覚ましい今日、人工知能ではなく、人間が何かを「つくる」意義はどこにあるのか？　青葉の茂る季節が終わり、植物は春の芽吹きに向けて冬の眠りに入り始める。我々も自身の新たな芽吹きにむけ、「つくる」について今一度考えてみよう。

（はらん）

詩作論

トルクァート・タッソ著
村瀬有司訳　水声社



お次は「詩をつくる」ことに目を向けてみたい。16世紀イタリアの英雄詩を語る上で外せない存在、トルクァート・タッソ。彼が注目に値する所以は、ただ詩人として優れていたからではない。創作活動に加え、理論という観点からも詩作に向き合ったことが、今日まで続く名声を彼に与えることとなったのだ。

「詩人が神聖と言われるのは、彼がこの仕事において創造主に類似しており、その神性を分かち持つために他なりません」。タッソが英雄詩の筋立てに求めたのは、この世界の完全性と調和を落とし込んだかのような美しい「単一性」すなわち「統一性」であった。さらに重要な要素として彼は、アリストテレスの『詩学』以来唱えられてきた「本当らしさ」と、16世紀に一世を風靡した騎士物語に特徴的な「驚異」の共存を唱えたのである。こうした見解は、理論にありがちな〈非実践的〉主張と映るかもしれない。ところが驚くことに、タッソという優れた詩人はその〈理論〉を見事に〈実践〉へと移してみせた。〈理論〉と〈実践〉の双方に秀でたという意味で、彼は「詩をつくる」ことにおいて、設計者であると同時に職人でもあり、一つの詩の世界の「創造主」であったと言えるだろう。

さて、本書は詩に関心のある全ての方に読んでもらいたいのだが、古い時代の作品に抵抗のある方には、まず訳者の解説から入ることをお勧めする。本書の時代背景となる宗教・思想状況がタッソの文章の如く理路整然と説明されているので、内容理解を大いに助けてくれる。本書を読む誰かがいつか、詩の世界をつくる創造主の1人になってくれることを期待しつつ本書評を終えたい。（**はらん**）

（160頁　税込2750円）

J.R.R.トールキン世紀の作家

トム・シッピー著　沼田香穂里訳
伊藤盡訳監修　評論社

“In a hole in the ground there lived a hobbit.”

この一文を目にすると心が躍る。これは、J.R.R.トールキンによる『ホビットの冒険』の始まりの一文であり、『指輪物語』へと続く壮大なファンタジーの世界「中つ国」の始まりでもある。現実には存在しない中つ国、そこに生きるエルフやドワーフ、そして彼らとの旅路は、世界中の読者を夢中にさせる。そんな第二の世界を「つくる」とき、それはどこから始まるのだろうか。

文献学者（philologist）・トールキンの場合、「言語の創造が土台」となった。その一つに、彼はエルフ語をつくる。それもちょっとした挨拶表現を、というレベルではなく、体系的な音韻と文法を持ち、話者の社会と歴史の中で派生していく言語を創造したのである。そして、中つ国の地図を描き、暦を定め、月の満ち欠けを計算した。その緻密さからは文献学者・トールキンの熱意が伝わってくる。言葉にはそれを話す者、話される土地があり、そしてそれは使用される中で月日の流れとともに変化していくのだ、と。トールキンが「つくる」世界が単なる空想にとどまらない所以はここにある。その学識に支えられ、文献学者がそうするように、言葉のひとつひとつから「再建」された世界なのである。作者の知の積み重ねが人々を魅了する。

本書は、トールキンと同じ文献学者であり、その晩年には直接言葉を交わすこともあったというトム・シッピーによる作品評伝。トールキンが用いた言葉とその源を文献学の視点から読み解いていく。中つ国の旅のみならず、あなた自身の創作の旅路においても、本書は良き“旅の仲間”となるだろう。　（**ひるね**）

（501頁　税込3080円）

写真論

スーザン・ソンタグ著
近藤耕人訳　晶文社

元来、写真を撮るという行為は「つくる」行為に他ならなかった。被写体に反射した光は小さな穴を通って銅板上で再び像を結び、ヨウ化銀を反応させる。

そうしてできた銀板写真（ダゲレオタイプ）はその表面に静止した過去の光景を写しながら質量を持つ物体として世界に存在し続ける。フィルムの登場によって写真は大衆化し、デジタル化とスマートフォンの普及により今や世界中の人びとのポケットの中にカメラがある。あらゆる人が撮影者となり、SNS では日々大量の写真が投稿され、消費されていく。実体を伴わずに写真が増殖していく今日こそ、写真というものの本質にむきあう意義がある。その手助けになるのが本書だ。1977 年に書かれた古典作品だが、写真の本質に切り込むソンタグの深い洞察が古びることは決してない。

ソンタグは写真芸術や報道写真、映像作品を苛烈に批評しながら、写真を撮ることや撮られること、見ること、選ぶこと、並べることといった行為の持つ意味や、社会的な地位について考える。シャッターを切った瞬間、世界に存在していた光景は写真として固定され、過去を物体として現在にとどめる。小片となって組み換え可能になった過去は、前後の文脈をはぎとられ、ただ写る光景以外の何でもない存在として、撮影者に所有される。

彼女の論の中心には、時間を超越して持続する写真の権力性が常に据えられている。その言葉は熱く、今も変わらない、写真の根底にある本質を読者に強く投げかける。「そこに表面がある。さて、その向うにはなにがあるのか、現実がこういうふうに見えるとすれば、その現実はどんなものであるはずかを考えよ、あるいは感じ直観せよ」。（**たいやき**）

（221 頁　税込 1980 円）

ことば遊び悦覧記

塚本邦雄著
河出書房新社

岡井隆、寺山修司と共に「前衛短歌の三雄」と称される塚本邦雄。彼が古今東西の様々な「ことば遊び」を選りすぐり、解読し、たまに自分でつくってみたのが当書だ。いろは歌、回文、形象詩、文字鎖、輪形詩等、多種多様な芸が詰まった宝典。神武天皇も平安貴族も徳川家康も昭和の市井の新聞投稿者も白居易もルイス・キャロルも、手元の「ことば」をおもちゃに、「つくる」ことを楽しんだのだ。

回文「長（なが）き夜（よ）のとをの眠（ねむ）りの皆目（みなめ）覚（さ）め波乗（なみのり）舟（ふね）の音（おと）の佳（よ）きかな」など親しみあることば遊びも多くの珠玉が蒐集されているが、当書にはもっとアクロバティックな作も現れる。源順の碁盤歌は特に必見だ。塚本も絶賛する本作は、和歌でつくった碁盤の対角線とその平行線にこれまた和歌を配したクロスワードパズルのような代物。その和歌の数なんと 50。それだけでない。この頁の余白にでも碁盤を書いて斜線を引いてみてほしい。「田」と「米」の字が見つかるはず。源はそれを踏まえ農耕歌で碁盤をつくった。碁盤の右から左へ季節が移り行く仕掛け付きで。十センチ四方に魂込めすぎでは？　その美学、天晴れ！

お次は伊勢物語の「かきつばた」でお馴染み、折句の微笑ましいやり取りを紹介したい。

「ちかきやまぢかきすまゐきながらこと問ひもせずはるは過ぎぬる」　　松永貞徳

「ちよ経ともまたなほ飽かできたきはこれや初音やはつほととぎす」　　木下長嘯子

「粽五把（ちまきごは）参らする」に「粽五把（ちまきごは）持て囃す」。初夏の爽やかな景色に裏メッセージが潜んでいる。これは楽しい、誰かとやりたい！

「つくる」は、とても親しく愉快な生涯の友。あなたもつくってみませんか。　（**黄丹**）

（196 頁　税込 3135 円）

メイキング

ティム・インゴルド著
金子遊／水野友美子／小林耕二訳　左右社

今回の特集を「自分は“つくり手”ではないから」と、傍観的に読んでいたあなたに、ぜひ手に取って欲しい一冊がある。

本書は、社会人類学者インゴルドが、2024年からアバティーン大学で開講している講義名でもある「四つのA」——人類学（Anthropology）、考古学（Archaeology）、芸術（Art）、建築（Architecture）を出発点に、籠、彫刻、握斧、ゴシック聖堂などの例を挙げながら、「つくることを通じて思考すること」を論じたものだ。つくること、それは頭の中のある固定された完成形に向かって物質を変形させることではない。それは、絶えず変化するあらゆる物質と、絶えず変化するつくり手のイメージが「力を合わせる」ことで生まれる、「成長」の過程なのだ。

例を挙げよう。ある時著者と学生らは、浜辺で籠の編み方を教わった。そこで彼らが実感したのは、柳のたわみや摩擦が、籠枠の枝を上方へと押し上げようとする風が、筋肉の痛みが、一人一人の背丈が、相互作用し、形をつくりだす過程に入り混じっているということだった。木材や周囲の環境と自分が、呼応することで、籠と呼ばれる形になった。

人類学や考古学は、一見こうした「つくること」とはかけ離れているが、そうではない。著者は自身の専門である人類学を、対象について学ぶ学問ではなく、対象とともに考えるプロセスだと述べる。さらに読者は「つくること」が、学ぶことそして生きることの全てに通ずるのだと、本書を通して知ってゆく。「本を読んではいけない」と著者は言う。「本とともに読みなさい。そうすれば、その書物はあなただけの道を指し示してくれるだろうから」。　（**茫漠**）

（320頁　税込3410円）

ぼくはあと何回、満月を見るだろう

坂本龍一著　新潮社

教授は2023年3月28日にこの世を去った。稀代の音楽家・坂本龍一によって新たな音楽が創り出されることは、もう決して、ない。

細野晴臣・高橋幸宏とともに1978年にYMOを結成。日本の音楽シーンに激震を走らせた彼は、「戦場のメリークリスマス」「ラスト・エンペラー」など数多くの映画音楽を手掛け、世界的音楽家として歴史にその名を刻んだ。幼少期からの半生を綴った前著『音楽は自由にする』に続き、本書では2009年以降の経験が語られる。

迫り来る老い、3.11の震災、再発するガン、先の見えない闘病生活——「ぼくはあと何回、満月を見るだろう」——死期を悟りながらもそれでもなお、彼は新たな音楽を模索する。「音楽は時間芸術だと言われます。時間という直線の上に作品の始点があり、終点に向かって進んでいく。……自分自身が健康だった頃は、どこか時間の永遠性や一方向性を前提としていたところがあったのですが、生の限定性に直面した今、これまでとは違った角度から考え直す必要がるのではないか」。

音楽を創り続けるということ。それは果てなき砂漠を独り歩み続けるような、深い海に息を止めて潜っていくような、苛烈で、残酷で、孤独な営みだ。彼は何に苦悩し、感動し、この世を旅立っていったのだろう。本書は、朴訥としていながらも流麗な、まるでChet BakerのTpの音色のような言葉で紡がれた自伝的エッセイだ。音楽家・坂本龍一の軌跡を縁取る最後の一冊。ぜひあなたにも読んでもらいたい。最後に、本書の末尾にもあるこの言葉をここに記そう。R.I.P.

Ars longa, vita brevis.

——芸術は永く、人生は短し——（**浅煎り**）

（288頁　税込2090円）

新刊コーナー

これが生活なのかしらん

小原晩著
大和書房

暑い夏がやっと終わった。大学が始まって毎日が飛ぶように過ぎていく。起きて大学へ行って働いて食べて、そして寝る。どんどん過ぎていく時間の中で、ふと思う。私は何をしているんだっけ、と。

小原晩さんは、そんな過ぎゆく日々の一瞬一瞬を切り取り、ことばにして『これが生活なのかしらん』と名前を付けた。ひとり暮らし、三人暮らし、実家暮らし、寮暮らし、そしてふたり暮らし。とっておきの絵を見せてもらっているような、そんな一冊だ。

塩バターパンに切り込みを入れるところから始まる一編「自炊風景」。トーストされたパンに冷蔵庫から出した生ハムを詰める。三人暮らしのある日の一編「今日はたのしい手巻き寿司」。土鍋で米を炊く酢飯担当の子がぴかぴかしている。部屋の空気や温度が伝わってくるような、読む人のいつかの記憶にそっと触れる文章である。けれど、書き記されているのは、楽しいことや嬉しいことばかりではない。「うらめしやうらめしやと呪ってみる」ことだってある。理不尽なことやがっかりすること、そういうことも並べて書くのだ。

彼女のことばで書かれた生活は、必ずどこかに光が射す。それは、絵の中央に燦々と降り注いでいたり、片隅にささやかな日向を作っていたりする。彼女は日々の暮らしにある小さな光を見つけて、ことばでそれを確かなものにする。そして読んだ私は、きっとこれも生活なのかな、と思ったりする。（ひるね）

（一八四頁　税込一六五〇円　9月刊）

SWITCH VOL.41 NO.9

特集：ジブリをめぐる冒険
新井敏記編　スイッチ・パブリッシング

※以下ネタバレ注意

先日、宮崎駿が監督を務めたスタジオジブリの最新作『君たちはどう生きるか』を遅ればせながら観に行った。感想は一言。「いいもんを観れた」。主題歌が流れ、映画が終わり、劇場が明るくなったとき、私はそう思った。たしかに突っ込みどころはたくさんある。わからないところもたくさんある。けれど、「いいもんを観れた」という感触は、それにもかかわらずしっかりとある。名作とはおそらく、そうした感触を人びとに残すものなのだろう。

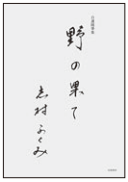
それから数日後、私は書店を訪れ、本書を買った。実はずっと前から買おう買おうと思っていたのだが、「絶対にネタバレが書いてある！」と思って、買わずに我慢していたのだ。けれども今はネタバレなど何のその、心置きなく読むことができる。あいみょんや木村拓哉などの声優陣、主題歌を担当した米津玄師や作画を担当した本田雄へのインタビュー記事が並ぶ本書だが、目玉は池澤夏樹による鈴木敏夫へのインタビュー記事。開始早々、池澤からこんな言葉が飛び出す。「宮崎映画に意味を求める必要はない。「これは何なんだ」と言い出すときりがない」。思わず「その通り！」と手を打ちたくなる。一方で鈴木は「宮崎駿に出会ったが百年目」などと愚痴をこぼしつつ、こんな言葉をぽろりともらす。宮崎は「すごい人です。それで面白い人。おかげで僕の人生が豊かになりました」。

ちなみに、宮崎駿はすでに次回作に向けてやる気満々らしい。鈴木は言う。「僕はもう、止めないですよ。しょうがないです」。（ぱや）

（一三六頁　税込一一〇〇円　8月刊）

自選随筆集　野の果て

志村ふくみ著
岩波書店



染織家にして随筆家――そんな稀代の肩書きを持つ者、それが志村ふくみである。本書には、御年九九歳の志村が自選した随筆が、「私」「仕事」「思想」の三本柱でまとめられている。志村が大切にしているそれらの随筆からは、穏やかで優しい、けれども芯の通った志村の人柄が静かに感じられる。

志村の生涯は「私」の章で語られるが、やはりひとつの世紀を生きただけあって、その人生は数限りない喜びと悲しみに満ちている。養女としての生活、兄との死別、母との再会、そして染織との出会い。どれもみな、一冊の本をもって語るに値する出来事だが、とくに印象的なのは実の母との生活を綴った文章だ。志村は母をこう描写する。「常に夢みがちな母は、夕餉の途中でも夕陽が美しいといって子供達をひきつれて、野道に走り出るような人だから、家事はまことに下手で、本を読むこと、手紙をかくこと、なかでも人と語り合うことが好きであった」。こんな不器用な母を、志村は今でも記憶の中で愛しているのだろう。

読んでいてはっとさせられた母の言葉がある。「ひとは一ばんはじめの作品ですべてわかる」。つまりもし人に「やるべき仕事というものがあるとすれば、その出発点において帰着点がどこかにさだめられている」。母はそれゆえ、志村が初めて着物を織った時、「もうそれ以上の着物は織れないかもしれない」と言った。だとすれば私の、あるいはあなたのすべては、たとえば卒業論文や修士論文にすでに含まれているのかもしれない。自分はそれに見合ったものを書けただろうか。（ぱや）

（三四二頁　税込三三〇〇円　5月刊）

ロバのスーコと旅をする

高田晃太郎著
河出書房新社

「ロバが好きだ」……著者の趣向を表すシンプルな一文で始まる。これ自体は本の題名からも容易に想像することができるだろう。そして、ロバと海外を歩く旅をしているという点において、他の旅とは一線を画している。本書では、そんなロバ好きの著者がイラン・トルコ・モロッコの三か国でそれぞれロバと旅をした軌跡が描かれている。

旅行の目的は人それぞれである。かけるお金や行く場所、そしてどのようにふるまうかによって旅の内容は大きく変化する。著者の目的はロバと自由に歩きながら旅をすることであった。そのため、目的地もロバが多く生息する国であり、それに必要な金額を支払っている様子も伺える。もちろん、徒歩でロバと旅をすることは容易ではない。筆者の旅物語は、旅行記で描かれがちな旅の楽しく良い側面だけではない。犯罪に遭遇した話や行き過ぎた親切によりストレスを感じた話など、所謂「日本とは異なる文化」に対する素直な感情を含めたネガティブな話も多い。

このような著者の非凡な旅は、X（旧Twitter）で大きな話題を呼んだ。評者も筆者がリアルタイムでロバのソロッベとトルコを旅している時に、Xの投稿を毎日のように確認していた一人である。本書における旅の様子は、Xで投稿されていた事象を線でつないだような内容で構成されている。日本で日常生活を送っている上では感じることのない苦悩や葛藤、そして時には面白いことやうれしいこと……。非日常を感じたい時におすすめする一冊である。（プラチ）

（二〇八頁　税込一七八二円　7月刊）

イラク水滸伝

高野秀行著
文藝春秋

書棚でひときわ目を惹く深紅の表紙、三日月形の川船に乗り恰幅の良い男性の後ろでパドルを握るのが、ノンフィクション作家・高野秀行だ。「誰も行かないところへ行き、誰もやらないことをし、誰も書かない本を書く」をポリシーに高野はこれまで多くの作品を発表してきた。前作『謎の独立国家ソマリランド』にのめりこみアフリカ研究をはじめるにいたった評者にとって、高野の大型新作である本書を手に取るのは必然だった。

本書の舞台はイラク、ティグリス川とユーフラテス川の合流点にある巨大な湿地帯「アフワール」だ。人類最古の文明メソポタミア文明の誕生から現代にいたるまで、高い葦が茂り水路が入り組むアフワールは、敗走兵や迫害されたマイノリティ、山賊や犯罪者の逃げ込む避難所だった。その様子を高野は梁山泊になぞらえる。本書は謎に包まれたアフワールの実態を暴く、混沌と迷走の旅の記録だ。

食い倒れのバグダード、古代宗教マンダ教、巨大な葦の館、水牛と暮らす湿地民マアダン、謎の刺繍布、何ひとつ予定通りに進まないからこそ新たな謎が続々と現れる。高野節全開の文章に頁をめくる手は止まらず、ジャーシム宋江やアヤド呉用など水滸伝をオマージュして名づけられた仲間たちにも愛着がわく。

人びとに根差す視座が高野作品の魅力だ。研究者への取材と膨大な資料の読み込みも欠かさない。だから、歴史の裏にある生活世界を精緻に記述することができるのだろう。一線級の民族誌でありながら圧倒的なエンタメでもある、すさまじい労作だ。（たいやき）

（四八〇頁　税込二四二〇円　7月刊）

外資系の言語学

黒田良著
日本橋出版

京大ですら、英語が話せさえすればコミュニケーションを取れると盲信している輩が多くて辟易している。そんな私の憂鬱を吹き飛ばしてくれたのが本書である。

著者は自身の外資系企業勤務経験と言語学の研究を組み合わせ、異言語環境でどのようにコミュニケーションを取ればよいかを追究している。例えば、欧米系のボスと話す際に日本人マネージャーが最も注意するのは英語の流暢さではなく、論理性・明瞭性だという。よって、欧米系のボスには結論第一の話し方に、日本人ボスには「起承転結」の話し方に言語切替え――コード・スイッチングを行い、円滑に事が運ぶように心掛けている。

コード・スイッチング自体ではなく、それを外資系企業勤務者がどのように行っているか等を本書は取り扱う。そのため、言語学の名を冠してはいるが、文法などを主に扱う言語学より、言語に関する人間行動を主に扱う応用言語学に分類する方が適当だろう。

本書の面白さは、外資系企業を日本における異文化・多言語環境と捉えるだけでなく、多文化共生社会化する日本の未来予想図と捉えて研究内容をまとめている点だ。ゆえに、外資系企業での言語使用のほか、商品としての英語教育、英語公用語化問題なども扱う。

事例が欧米系企業に留まっており、研究対象者が日本人と欧米人だけという点は惜しい。なぜなら、アジアの一部である日本が、他のアジア諸国を無視して異文化は語れないからだ。とはいえ、示唆に富んだ内容だ。これから世界に羽ばたく諸君、読まれたし。（前髪）

（一三五頁　税込一七六〇円　8月刊）

中国の死神

大谷亨著
青弓社

「無常」、それが本書のメインテーマである中国の死神の名前だ。無常は中国の民間信仰において非常にポピュラーな神様であり、その役目はあの世からのお迎えといったところだ。表紙にあるように、長い帽子に長い舌というのが無常の基本的なイメージだ。

しかし、広い中国を渡り歩いてみると無常の多種多様なバリエーションと出会う。黒い無常と白い無常のペアが最もオーソドックスであるが、時にはチビの三人目と共に祀られていたり、白い無常一人だけという場合もある。こうした変化が生じたのは何故か、そもそも無常の誕生の経緯とは、なぜ不吉な死神が人気なのか。湧き出てくる無常の謎を、軽快な文体と共に解き明かしていく。

本書の魅力はフィールドワークを中心とした構成にある。中国に赴き調査する過程を詳細に解説していく様子は紀行文さながらであり、気負わず読み進めることができる。意外なものが入っている装備リストや難易度別の調査方法紹介を眺め、無常を巡る旅を楽しんでいると、自然と無常について詳しくなってしまう。要所要所に挟まる鮮やかな情報の整理に感心し、興味深い推論に導かれ、無常の謎に魅入られていく。遂には無常の背景にある、儒教や仏教では捉えられない、中国の民間信仰の一面も浮かび上がってくる。

本書は多様な読み方ができる不思議な一冊だ。中国旅行記として読んでも良いし、情報が自然とつながるミステリのような読後感もある。「研究」という営みの面白さも伝わってくる万人におすすめできる一冊。（茂）

（一九二頁　税込二八六〇円　7月刊）

進化が同性愛を用意した
ジェンダーの生物学

坂口菊恵著
創元社

読者の多くは、自然選択説や適応主義を耳にしたことがあるだろう。生物の持つ形質や行動セットは、それが環境に適応し、子孫を残すうえで有利であるがゆえに脈々と受け継がれているのだ、とそれらは主張する。強い説得力を持つ理論だが、しかし、人間社会だけでなく自然界でも広く見られる「同性愛」は一体どのように説明されるのだろう？

様々な動物で同性間性行動が見られるという知見それ自体も本書の要点の一つだ。事例は豊富で、なおかつ雑学的な面白みがある。

それに加えて著者は、性にまつわる固定観念の解体、そして再構築を提案する。ポイントは、ジェンダーこそが生物学的なベースにあるとする点だ。通常この言葉は生物学的性＝セックスと対置されるため、人間限定の概念に思われる。しかし、ジェンダー＝行動で表現される性、と解釈すると状況は一変する。例えばクマノミでは群れの環境に応じて性転換が行われるが、それに伴う行動の変化は生殖腺とホルモン上の性転換に先行する。つまり、ジェンダーはセックスに先立つのだ。

また、著者は更に、性行動が生殖のためだけにあるという観念を疑う。事例に鑑みれば、個体間の協力や紐帯のための性行動という側面を仮定する方が理に適っているのだ。

「自然の摂理」に適うことが何らかの価値観を正当化するわけではない。しかし本書の議論のように、最新の生物学的知見が新たな枠組みの提供を可能にする場合もある。議論が錯綜する性の問題について、本書とともに再考してみてはいかがだろうか。（朝露）

（二二四頁　税込一七六〇円　6月刊）

未来から来た男
ジョン・フォン・ノイマン
アナニヨ・バッタチャリヤ著
松井信彦訳　みすず書房

ノイマンの名は多くの分野で見られる。数学はもちろん、コンピュータやゲーム理論、更には宇宙探査機にまで。これほど多彩な分野にその名を刻んだ人間はおそらく彼一人だろう。本書はこの想像を絶する才能を持つ「未来人」の生涯を綴った評伝である。

本書はノイマンの生涯を辿りつつ、彼が引き起こしてきた革命の数々が詳細に語られる。ハンガリーに生まれたユダヤ人としての幼少期から始まり、集合論、量子力学、原子爆弾開発、コンピュータの発明へと進んでいく。各分野の解説は難しいが、専門的な説明に加えて、かみ砕いたわかりやすい説明が併記されており雰囲気は掴みやすい。加えて、当時の科学者たちの姿勢や議論も紹介され、科学史としても楽しめる。本書の魅力は、こうした歴史の流れの中でノイマンの功績を眺めることができる点にある。ノイマンの功績の多くは専門家でなければ理解しづらく、その影響力も測りにくい。当時の科学者たちの各分野における信仰や動乱を交えた本書の説明を読めば、当時の情勢やノイマンの功績のインパクトの大きさが把握でき、ノイマンが「未来から来た男」という表題に違わぬ才能の持ち主であったことが伝わってくるだろう。

天才と呼ばれる人間は理解できない存在として扱われがちだ。とりわけノイマンは原子爆弾投下に積極的だったこともあり、本邦では悪魔化されて語られることが多い。比較的中立の立場からノイマンの功罪を紹介しつつ、その両極端な人間性を語ろうとしている点も本書の特色の一つだろう。　（茂）

（四二四頁　税込三九六〇円　9月刊）

モルブス・アウストリアクス
――オーストリア文学をめぐる16章
前田佳一編　法政大学出版局

憎悪を抱きながらも、その対象から離られない。その不幸を彼らは書く。毒花が繁茂し、しなびて大地を肥やすように。

まずは題名について。「オーストリア病」を意味するこの言葉は、同地の文学に与えられたある評言に因む。二〇世紀前半、再三の急変を経験したかつての帝国では、数多の作家が文化的アイデンティティの喪失に直面した。その事態への否定的愛憎が、戦後の作家にも引き継がれる。本書ではその系譜から開花した詩作の数々に、一六もの論考を通じて迫っていく。そこでは近年翻訳の盛んなベルンハルトから、叙事詩「ニーベルンゲン」の知られざる翻案者メルに至るまで、様々な作家たちの作品が取り上げられている。

クリムトらの世紀末文化やマグリスの提唱した「ハプスブルク神話」など、従来形成されてきたオーストリア観に、この研究書は一石を投じる。シュテファン・ツヴァイクを扱った杉山論考はその最たるものだろう。彼の回想録『昨日の世界』では、たしかに「古き良き帝国」が理想化されていた。だがツヴァイクは帝国の崩壊や亡命後の国籍喪失といった「危機」の記憶をもまとめながら、故郷の全体像を構築していたという。ともすれば無批判な郷愁に回収される作品解釈を退け、論者は作家の時代認識と、テキスト外の情報とを往復し、先入見なき診断を下している。

亡命先で自殺したツヴァイク然り、「オーストリア病」の罹患者には暗い影が差す。得も言われぬ毒気を放つその腐れは、しかし苗床となり次の花を咲かせる。　（投稿・渡世）

（四三六頁　税込七四八〇円　5月刊）

客観性の落とし穴

村上靖彦著　ちくまプリマー新書

私たちの生活には、「客観性」が重要な指標として当たり前のように浸透している。本書はそんな現代社会に警鐘を鳴らす。一九世紀から普及し続けているこの概念によって、自然や社会のみならず時間や心までもが「客観的に」捉えられるものになってしまった。

そこで著者が提案するのが、個人の経験や語りから出発する思考法である。医療現場や貧困地区の現場で聞き取りを行ってきた著者は、そこで語られる「経験の生々しさ」を「客観性」とは対照的なものとして位置付ける。即興の語りには、同じ言葉の繰り返しや、微妙な語尾の変化などのたどたどしさがあり、そこにこそ事態の深刻さが表れるという。個人の経験や社会が抱える課題は、「ヤングケアラー」「ネグレクト」という客観的記述から一歩踏み込むことで初めて見えてくる。

著者の主眼は社会的弱者の声を掬い上げることにあるが、本書の内容は学歴や年齢が過大評価される社会や、個人の意見が感想にすぎないと揶揄される現代の風潮への提言にもつながるだろう。（茫漠）

（一九二頁　税込八八〇円　6月刊）

問いを問う
――哲学入門講義

入不二基義著　ちくま新書

「哲学って何をしているの？」哲学徒のはしくれでありながら、私はこの質問にうまく答えられたためしがなかった。哲学史を説いてみせるのも、面白い思考実験を披露するのも、何か違う。しかし今後は、本書を推薦することが良い回答になるだろうと思っている。

初学者向けの講義をもとにした本書の焦点は、誰かの思想体系を読解して哲学を知ることにはない。読者は本書を通じて、哲学することを体得するのである。

例えば、「心と脳はどのように関係しているか？」という、いかにもな問いが登場する。本書はこれに、正解を与えようとするのではない。この問いは一体何を問うているのか、また、あり得る回答はそれぞれどんな存在論や認識論を前提としているのかなどと、更に問いそのものを問うていく。

問いが深まった各章の終盤は時に入門を超える難易度にもなるが、それだけ一層面白い。そして、そこへ至る歩みに飛躍はないため、やはり初学者に自信を持って推薦できるのだ。粘り強く読んでほしい一冊。（朝露）

（三三六頁　税込一二一〇円　9月刊）

日本人が知らない戦争の話
――アジアが語る戦場の記憶

山下清海著　ちくま新書

著者は「時間がないので、太平洋戦争のところは、自分で勉強しておきなさい」と高校時代に指示された経験を持つ戦後生まれの大学教授である。本書は筆者が日本人学生のアジア・太平洋戦争に関する知識の乏しさを感じたことをきっかけとして書かれた本である。

実際に著者の体験談を中心としているものの、シンガポールや韓国の教科書など、日本軍が戦争を展開したアジア各国の様々な文献を参照している。そのため、日本からの一方的な史実の捉え方だけではなく、アジア諸国から第二次世界大戦に関連する史実がどのように捉えられているのか、その違いが明確に示されている。そして、事件や衝突などの史実が国別に、時系列順で描かれていることが、さらに読者の理解を深めることに繋がっている。何よりも、史実が未だにはっきりとしていない点について明確に「わからない」と記述されていることが、日本とアジア諸国それぞれの視点が異なることをより強調する。筆者の視点に偏りがないことから、史実について読みやすい一冊となっている。（プラチ）

（二三四頁　税込九六八円　7月刊）

大学入試、再考

大学入試（以下、入試）への英語民間試験導入が猛反発を受け、頓挫したのは記憶に新しい。これに限らず、文部科学省の入試改革はことごとく失敗している。なぜこのような事態が発生するのか。我々は入試をどうすべきか。入試を議論するために、まずは『**大学入試がわかる本**』（岩波書店）で基礎知識を身に付けていこう。

◆理念不在の入試改革◆

本書の目的は、入試改革の理念が妥当だったのかを再検討すること、そして専門家や教育現場の知見・意見を整理して議論の土台を再構築することの二つである。

Ⅰ章は戦前期から入試改革が繰り返され、「公平性の確保」、「適切な能力の測定」、「下級学校への悪影響の排除」という「日本型入学者選抜の三原則」によって学力一辺倒の入試スタイルが保持されてきた歴史を振り返る。Ⅱ章は一発勝負のプレッシャーから受験生を解放するために、試験を複数回実施する方法をテスト理論の観点から論じる等、具体的な試験実施方法を取り扱う。Ⅲ章は共通試験にまつわる問題や高校教育を総括し、今後は入試を「選抜」ではなく「教育」と捉えるべきだと主張する。最後のⅣ章では、エスカレーター進学や障がいがある受験生に配慮した試験、スポーツ推薦や美大受験といった一般選抜以外の「傍系」選抜の現状と問題を指摘する。

日本には多様な入試があるにも関わらず、それらを活かしてどういう人材を育成したいのかという理念が現在の入試改革にはないことが本書から分かる。だが、入試改革の理念が提示され、それに応じた入試が施行されるのを待たずとも、自らの手で道を切り開くことはできる。これに適しているのが、総合型選抜（旧ＡＯ）入試だ。

◆自分の人生と向き合う総合型選抜入試◆

最近上梓された『**脱優等生のススメ**』（ハヤカワ新書）を読めば、総合型選抜入試が求める人物像や、達成したい目標を知ることができる。著者は日本初の総合型選抜入試導入に関与した冨田勝教授だ。

答えのある問題を解いたり、過去のデータをもとに未来を予測したりすることが得意な人を「優等生」とし、常識に捉われず興味があることに集中して新しいものを生み出すことが得意な人を「脱優等生」と呼んでいる。両者とも必要な人材であり、両者間で優劣をつけることに意味はない。それよりも、自分は何が得意か、何を人生で達成したいかを考え、それに応じて自分のゴールを設定し、行動するよう促すのが本書の、ひいては総合型選抜入試の意図である。

◆◆◆

ＡＩの台頭や少子化により入試変革は喫緊の課題だ。そして変革には、目的を共有し、多様な入試を束ねる理念が必要だ。どんな理念が未来の担い手を育成するのに相応しいか、専門家と共に考えることが有権者に求められている。他方、大学進学希望か、総合型選抜入試受験者か否かに関わらず、すべての高校生が入試を人生と向き合う機会と捉え、自分の得手不得手を鑑みた選択――就職や入試方法等の選択をしなくてはならない。

本書評が入試再考の端緒となれば幸いだ。

（前髪）

地獄のように熱く、恋のように甘く、思い出のように苦く

——十一月にもなるといよいよ冷え込んできて、コートを着込むようになったとはいえ、百万遍の信号待ちに吹く北風は耐え難い。どこか喫茶店にでも入って暖を取ろうか、ついでに午後の授業もサボってしまおうか……そう考えていた折に、こんな看板を見つけた。

《喫茶・綴葉》

——こんなところにお店なんかあったかな……？　でもどこか惹かれる店構え、芳しい珈琲の香り。心を決めて、ドアを開く。

「どうぞ、いらっしゃいませ。喫茶・綴葉のマスターの浅煎りです。当店では珈琲にぴったりの一冊をご案内しております。珈琲と読書の素敵な組み合わせをぜひご賞味ください」

◆◆◆

まずご紹介するのは『京都・六曜社三代記　喫茶の一族』。そう、三条河原町の地下と一階にまたがるあの喫茶店。本書では、一九五〇年の創業から現在に至るまでのファミリー・ヒストリーが辿られる。激動の時代のなか、人々に愛され続ける喫茶店を営むのは生半可なことではない。本書に浮かび上がるのは、六曜社という場がお客さんにとって心地良い空間であるように、日々珈琲と真摯に向き合う店主たちの姿だ。一杯の珈琲、そして喫茶店という場所が愛おしく思える一冊。

続いては、京大法学部出身の岡崎琢磨による大人気ミステリ、『珈琲店タレーランの事件簿』シリーズ。富小路二条に店を構えるバリスタ・切間美星が、京都で起こる事件を次々に解決していく。いわゆる「人が死なないミステリ」であるが、話のテンポ、スリル感、そして事件が解決されるあのミステリ特有の爽快感も一級品で、ついついのめりこんで読んでしまう（だから授業をサボって読むにはうってつけだと思う）。

三冊目は河出文庫の『こぽこぽ、珈琲』。湊かなえ、村上春樹、よしもとばなな、向田邦子、寺田寅彦、井上ひさし……総勢三〇を超える作家の珈琲エッセイが収められている。その筆致はマイルドブレンドのようにまろやかであたたかい。珈琲とは単なる飲み物ではなく、その手で豆を挽き（あるいは喫茶店に向かい）、豊かな香りを味わい、忙しない日々の隙間にほっと柔らかい空気を纏わせる、そんな一連の経験なのだと知る。

対してダークブレンドがお好みのあなたには、中公文庫の新刊『喫茶店文学傑作選』がおすすめ。こちらは漱石に始まり中原中也、澁澤龍彦など、やや硬派な作品が収められている。気分や時間、天気にあわせて読み分けるのも、一興だろう。

◆◆◆

さて、さらに深入りしたい方は『コーヒーの科学「おいしさ」はどこで生まれるのか』（講談社ブルーバックス）、『珈琲の世界史』（講談社現代新書）を手にとってもらいたい。これでもかというほどの専門的知識が、エスプレッソのように濃縮されている。

さぁ、いよいよ本格的な冬が始まる。本を片手に暖かい喫茶店に飛び込もう。立ち上る珈琲の香りを吸い込めば、それはもうあなただけの逃避行の始まりだ。

（浅煎り）

編集後記

8・9月号から綴葉の編集委員となりました、プラチと申します。片仮名でパッと聞いて意味の分からない「プラチ」という名前は、とある国で「朝が好きな女の子」という意味を持ちます。友人が挙げてくれた候補の中から一番響きの良いものを選んだ私は、朝早く起きる必要がある日の前日は徹夜をするほどの究極の夜型です。その代わりに、朝日が昇る様子を眺める機会も多く、トワイライトをぼぅっと眺めることも好きです。

そんな私は、とある自伝によって人生を変えられました。10月号の「私の本棚」というコーナーでも執筆させていただいたように、伝統と人権の狭間では様々な議論が行われています。この自伝の筆者は、約10年もの間、国際社会が人権侵害であり廃止すべきであると主張している行為に人生を捧げた人物です。しかし、この本の最後で「私は後悔していない」という筆者の意思を見たときに、私は現在の進路を決めました。

気分転換をするための本、学びを得るための本、考えさせられるような本、そして忘れられなくなるような本……綴葉を通じて、様々な本を私の視点から紹介していきたいと思います。まだまだ未熟者ではありますが、よろしくお願いいたします。　（プラチ）

当てよう！図書カード

酷暑から一転、すっかり寒くなりましたね。体調管理には気をつけたいところです。さてここで、季節の変わり目に役立つ問題です。

ドイツに留学中のあなた。授業中にクラスの一人がくしゃみをしました。さあ、なんて声をかけたら良いでしょうか？

1. Bier!（ビール）　2. Gewitter!（雷雨）
3. Gesundheit!（健康）　4. Drache!（竜）

（ひるね）

《応募方法》　答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記QRコードのリンク先（https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7）から応募することも可能です。正解者の中から5名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは12月15日です。

《7月号の解答》　7月号の問題の正解は、1.のナスニンでした。アントシアニンの一種で、あの綺麗な「茄子紺」の色素であるナスニンは、日本の博士によって発見されたためにこのような名前がついているそうです。図書カードの当選者は、ハードラーさん、青でんぶさん、えび天天さんの3名です。当選おめでとうございます。　（朝露）

読者からひとこと

○6月の特集「寝る間を惜しんで読んだ本」はおもしろかったです。私の「いまだに寝る間を惜しんで読める本」も、10冊ぐらいあります!!（笑）でも読みすぎて、体調を崩さないようにしましょう♡　（いいみょん）

――毎晩夜更かしを唆してきそうな、素敵な本棚ですね。健全なる読書もまた健全なる肉体に宿るとすれば、夜更かしの連発は厳禁！

○特集のテーマが毎回楽しく、知らない本をたくさん知れるから良い（理学部・えび天天）

――ありがとうございます。普段見かけない本も登場する特集の場を、今後もお楽しみに。

○いつもありがとうございます、楽しみに読ませていただいています。新書コーナーのジャンルが社会系に偏っている気がしました。自然科学系や他のジャンルも積極的に取り上げていただけるとうれしいです！

（農学部・レヂデント）

――こちらこそご愛読ありがとうございます。このお便りをいただいて以降、生物学、心理学などの新書を取り上げておりますので、お楽しみいただけていれば幸いです。ご指摘をありがたく受け止め、幅広い書評をお届けできるようこれからも努めて参ります！（朝露）